

「平穩死」の意味

ろか
芦花ホーム

常勤医師 石 飛 幸 三

われわれ日本人は、人生最終章の迎え方について、今こそ考えなければならない時に来ています。

日本は今世界一の長寿社会になりました。誰にも何れ老衰の果ての最期が訪れます。一方、科学は進歩し、延命治療は次々に開発されます。命を延ばす方法があるのにしないと責任を問うかもしれないという刑法 219 条「保護責任者遺棄致死罪」がわが国にはあります。事実、植物状態の患者の人工呼吸器を取り外したことが不作為の殺人罪に問われた川崎協同病院事件や射水市立病院事件が、医師に延命治療をしなければならないのではないのかという強迫観念を与え、老衰にも延命治療を強要する迷い路に入り込みました。自分の口で食べ物が食べられなくなったとき、胃瘻という方法があるとと言われると、国民は自分の最期の迎え方を選べるはずなのに、どこまで延命治療を受けるべきか迷います。結局、医療に過剰な期待をして胃瘻が急増しました。そうして、ものも言えなくて寝たきりで人生の最期を迎える方々が増えました。家族は、自分は管をつけた最期は嫌だ、苦しい死にはしたくないと言いながら自分の親には延命治療を押し付けていたのです。

多くの国民がこれではおかしいと考え始め、ここ数年様子が変わってきました。胃瘻をつけなければいけないと言われても断る家族が増えました。その上、この度胃瘻造設の診療点数が今までの約 7 割に減りました。その結果、胃瘻の数は減ってきました。しかし人生のあり方に関する基本的考え方ができていないと、結局は何もしないことは可哀想だと考えて、今度は胃瘻の代りに中心静脈栄養や経鼻胃管を選んでいきます。問題の本質を認識していないので、相変わらず何かしなければならぬと延命治療にすがっているのです。

胃瘻という“方法”が悪いわけではありません。役に立つのなら活用すべきです。命を延ばす方法があるなら“しない”と不作為の責任に問われはしないかと、それがご本人のためになるかどうかは二の次にして、とにかく何かしなければならぬと自己保身に走る、その姿勢が問題なのです。

老衰の最期には生体が必要とする水分や栄養の量がどんどん減っていきます。最終章では“入れない方が穏やかに逝ける”のです。老衰を医療で止めることはできません。生体は、その最終章では、しばしば自然に任せたいほうがかが静かに最期を迎えることができます。どうしてあげることが本人のためになるのか、我々の役目は、長かった人生の残り少ない老衰の最終章を、医療を加減しながら支えることです。

水分栄養を入れないから死ぬわけではありません。死ぬのだからもう要らないのです。命を延ばす方法があっても、しないほうが軟着陸できるのであれば、しないことが責任を問われない“法律”であるべきだと考えて、刑法 219 条「保護責任者遺棄致死罪」の解釈に一石を投じるために私が掲げた旗印が「平穩死」という言葉です。

高齢社会における老衰の最期を社会として支える者たちが多職種協働で、自然の摂理を受け入れて、坂道を穏やかに下って行く過程を支えてあげるのが、我々介護のプロの仕事です。職種による上下はありま

せん。本人の問題に焦点を当て、本人のためにどうしてあげるのが一番良いか、それには誰が力を提供するか、医療を“さじ加減”する時代が来たのです。老衰の最期を本質的に支えるのは、もはや身体的な延命ではなくて心のケアです。